

全国版

# 沿岸漁民代表らが訴え 「対馬・八戸沖の実態知って」

## 大臣許可漁業に指導強化を

JCFU全国沿岸漁民連絡協議会に所属する北海道から沖縄県の沿岸漁民の代表者らが11月29日、農林水産省を訪問し、対馬沖のアカムツ操業や八戸沖のスルメイカ操業で起きている実態について、対処を行うよう農水大臣に要請した。これらの操業に関わっている沖合底引網や大巻網など大きな漁獲圧力を持つ大臣許可漁業に対し、監督官庁である農水省が指導するよう訴えた。日本周辺の水産資源を守り、沿岸漁業や沖合漁業が持続的産業として発展できるように求めた。

## JCFU 農水大臣に要請

対馬沖のアカムツ操業 以東底引網解禁後、他県については、8月中旬の



武村農水副大臣（左）に要請書を提出する代表者（中央）と西川会長（右）

業が経営困難となつていると訴え、規制強化を求めた。

対馬の沿岸漁民には知られぬまま、他県の大規模な沖合底引網船が70隻から125隻型へ大型化され、対馬沖アカムツ操業に参入していると指摘。沿岸漁業資源を守るためにも大型化した沖合底引網船は沿岸800沖で遠くまで移動するよう指導強化を求めた。

八戸沖のスルメイカ操業については、現在の資源は極めて低水準の状況下にあり、沖合底引網漁業や大巻網漁業が同漁場で操業すると沿岸イカ釣り漁場が消失する状況が近年続いていると説明。このため八戸沖の大規模な沖合底引網船が70隻から125隻型へ大型化され、対馬沖アカムツ操業に参入していると指摘。沿岸漁業資源を守るためにも大型化した沖合底引網船は沿岸800沖で遠くまで移動するよう指導強化を求めた。

要請を前に同日、代表者らは水産庁内で会見を開いて各漁場の操業について詳細を説明した。対馬市曳網漁業連絡協議会の西川征二会長は「対馬海域を操業する大臣許可漁船も、新漁業法で80トから150トへ増トンしている。沿岸漁業資源を守るためにも150トへ増トンした巻網船については沿岸800沖で遠くまで移動するよう指導強化してほしい」と訴えた。

三沢漁協イカ釣り部会代表の代表者は「八戸沖での大臣許可の沖合底引網漁業により、春季に小型イカが毎年大量に水揚げされている。こうした多獲は沿岸イカ釣り漁業が対象とする夏イカへの加入を減少させ、資源管理上の観点からも重大な問題だ。サイズ規制措置を導入し、沖合底引網操業による小型イカ漁獲を禁止してほしい」と求めた。

JCFUの高松幸彦共代表（北のりも漁協）は「大臣許可漁業は強大な漁獲圧力を持つっており、制御できない状況にまでなっている。こうした漁業は水産資源の安定した条件の下でのみ操業許可されるべきもので、零細な沿岸漁業の資源や漁場操業に悪影響を及ぼすものであってはならない」と述べた。

農水省側では、宮下一郎農水大臣が公務で不在のため、武村展英農水副大臣が対応し、JCFUによる要請書を受け取った。当初の予定時間を過ぎる形で代表者らによる説明を受け、意見交換を行った。要請後に取材に応じた代表者らによると、武村副大臣は要請に「大臣許可漁業の透明性を確保するために、監視カメラを搭載し、位置情報とともに情報を公開するよう要望した」と述べた。

必要性についても説明。日本でも大巻網や沖合底引網漁業による海上投棄が問題化されていると指摘。資源管理を推進する国の方針に基づき大臣許可漁業操業の透明性を確保するために、監視カメラを搭載し、位置情報とともに情報を公開するよう要望した。

## 過去最大アイテム数 今年も知事がトップセールス

東信水産 青森フェアで



首都圏を中心に生鮮魚介専門店を展開する東信青森フェアで

水産課（東京都、織茂信尋社長）は青森県との連携を強化している。11月23～26日の期間で、旬の県産魚介類を集中提供する販促企画を各店で開催。25日には東京杉並区の荻窪本店に宮下宗一郎青森県知事も来店し、熱心なトップセールスを繰り広げた。

大間産のクロマグロ、④電飛マツカワとアンコウの握り。酢飯も青森一色で⑤ホタテのバターしょうゆ焼きを試食提案する宮下知事（右）と山崎町長（中央）

中泊町のメバルやマダラ、外ヶ浜町のマツカワガレイやボイルホタテ、風間浦産アンコウ、小川原湖産シジミ、むつ市大畑町の海峽サーモンなどをトップやのぼりなど掲げて集中販売。刺身やすしセットにも盛り込み、県のブランド米「青天の霹靂（へきれき）」を使用するなどして青森色をいっそう強めた。

青森県との連携フェアは2016年にスタート。同時期にはオリジナルブランド「ぬめえ青森」を立ち上げ、販促に力を

入れている。この取り組みが県から高い評価を受けており、県知事自らトップセールスする機会にもつながった。以来、コロナ禍のため断念した2020年を除いて、知事は毎年訪れている。例年60アイテムほどの商品で展開していたが、

今年85アイテムに上るなど過去最大規模に。売り場担当者は「アンコウをすしとして提供するのには首都圏では珍しい。この機会に存分に味わってほしい」と語り、品ぞろえの充実ぶりに自信をうかがわせていた。

このほか、葦ギョーザや大根とのギョーザ、切り干し大根とのナムル風のメニューもコンテストを盛り上げ、ワカメの実力を見せつけた。そのおしきに驚き、一般市場で最終審査に残った5つのレシピを美食で審査。審査員の中にはその場でワカメを購入する人もいた。

## ブルーカーボン推進

一般社団法人豊かな海の森創り

ブルーカーボン活動を推進し、地球温暖化の防止、脱炭素化への貢献を目指す「一般社団法人豊かな海の森創り」（吉川京二代表理事）がこのほど発足した。「未来の子どもたちへ豊かな海を残したい」とをビジョンに掲げ、CO2を吸収し、生物の多様化を育む海の保全・再生活動を推進していく。

同法人は趣旨に賛同する会員の会費で運営。個人会員は年会費2万円、法人会員は同3万円。会員には活動報告・情報提供のほか、ホームページなどに氏名・企業名を掲載する。問い合わせ先は同法人の桑原靖専務理事（電話03・6281・0223）。

日に宮下知事のほか、濱館豊光中泊町長や山崎結子外ヶ浜町長もPRに来た。今年就任した宮下新知事は前年まで熱烈にトップセールスを行ってきた三村申吾前知事の路線を継承し、マイクを使って熱心に県の魅力をアピール。「これからの寒い季節はアンコウ鍋がおすすめ。ホタテもシチューやカレー、みそ汁などどんなものにも活用できる」と呼び掛けた。

「童飛岬マツカワ」をPRした山崎町長は「幻のカレイと呼ばれるマツカワ。天然では北海道の一部で獲れるが、それを青函トンネルの岩盤からの清浄な湧水を利用して養殖に成功した。数に限りがあるが、この機会に是非ご賞味を」と呼び掛けた。

## 芯抜き体験や料理コン

「W11グランプリ」に協力 わかめ協会

日本わかめ協会は11月11～12日、東京・世田谷区の北沢駅前で開催された「W11グランプリ」にもきた商店街子どもたちに好評だった芯抜き体験

振興組合主催）に協力し、ワカメの消費啓蒙に取り組んだ。コロナ禍を経て4年ぶりの開催。来場者は5千人にも上り盛り上がりを見せた。

同協会はブース内でワカメをPRしたほか、子どもを対象とした広田湾産ワカメの芯抜き体験や詰め放題を実施し、好評だった。

このほか、葦ギョーザや大根とのギョーザ、切り干し大根とのナムル風のメニューもコンテストを盛り上げ、ワカメの実力を見せつけた。そのおしきに驚き、一般市場で最終審査に残った5つのレシピを美食で審査。審査員の中にはその場でワカメを購入する人もいた。

W11グランプリは、消費地である北沢と生